

短歌講座

(第九編)



阿部静枝

一 等

東京鐵工所支部 阿部 正治
雄日がりて放たれ舞る我が家の小さき電燈より見ゆ
争議が何かで留置場に暫く自由を奪はれてゐたが、釋放されて歸る時の雀躍の心、そして遠くから養ひながら、平和な我家の電燈を見つけた喜びがよく歌はれてゐます。闘争の犠牲は組合を守つたのでせうし、又短歌として再生しました。尙左の二首も佳作でした。

二 等
栃木縣 平野シズエ
運んで東京市電のゼネストの記者をよみつゝはつりめり
労働者にとつてゼネストは全く自分自身にびつたりと係はつてくることで

三 等

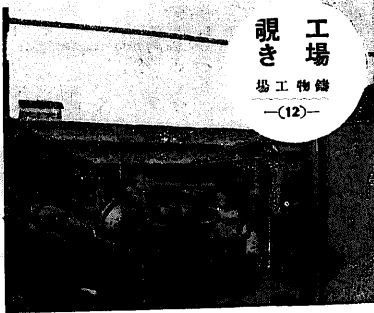
東京鐵工本所第二支部 關根 福藏
夕早く雨戸くる雷しきりなり時雨便儀のひやくとして
秋の夕ぐれの風景です。平凡なところながら、よく感づて感じも出てゐます。左の連作も佳作でした。

紡績請地支部 魚野 金城
青桐の葉葉は重たれこめて灰色の空は今日も葬れり
夜をこめて戸を打ち鳴らす秋雨に日さめて覺よ床のぬくもり
降り足し雨上らるし朝の舗道小砂利はたちて流はれてあり

工場

工場物語

(12)



我

國産物の重要な地位を占めてゐる埼玉縣川口市は、鑄物工場數三七一その附屬工場を合すと四七八工場、其従業員數約六千五百人を抱擁して、中小工業地としての代表的な町である。従つて中小工業の含む又、生み出すいろ／＼の行商や備品が、色濃く繰り出されてゐる。今日はその町のありのまゝの工場の変を見に出かける。

川

口市内でも、一番この金山町、そして蕨町が工場が多い町で、軒並と云つて、位半ばは家内工業的色彩を帯びた工場が並んでゐる。折柄「吹き」(材料の織をこし)にかけて、漆かす作業)をかかてゐて、物濃く炎の柱を立て、る光景や、型を作る黒色の砂が、山のやうに盛つてあるかたはらに、どこからこんなに集められたのかと目を眩らす金山の山やが鑄物町らしく、辻から辻へとつゞいてゐる。殊に目に立つたのは、徒弟の多いことだ、黒い砂にまみれた少年工の姿が可憐に胸を打つた。

め

さす蕨町の友愛鑄造所へつゝ。この工場は、東京鐵工組合の協同経営工場で、十四人の同志が、昨年八月より協同して守り育ててゐられる工場である。主任の高田さんはじめ、顔見知りの組合員がそれ／＼の職場で、心を打ちこんで働いてゐられる。

日盛りのタンクの下の番者に小蝶のしほすがた休めし
庭隅に植えし、なるけしの實の眞赤く
熱れて日ざし情も

五首とも揃つた佳作です。三首目が殊によいと思ひました。たゞとり立てゝ心を引くものがありません。歌として出来上つてはゐますが、幾分ありふれてゐるためです。

栗網小倉支部 山本 琴恵

五首は夕日に映ゆる奇館の
下に渦巻く人の波波
完成の奇館朝日に輝く
次々に就眠依帆の文の来し
農村不況にあえく若者等
同情にたへど悲なし我も又
報ひ得られる身にしあらねば

もう一息で傑作になる所です。この調子で勉強して下さい。

紡績請地支部 塚山 文夫

解がたき心の中に挟まれて
今日も流れて眠りけるかな
懐疑的な深みを見せやうとした作で

すが、作者自身の新鮮味が無いのが物足りない感じでした。

穂積 七郎

汝が来れば居ぬもあらし病も雨の日々に力加すやうれし
一句二句共、最初の句は非常によく出来てゐますが、最後の「うれし」と「悲し」と云ふ言葉を使はないうで、感じを出せばよろしいのです。「増して行きけり」としておきませう。

オイル隠りもの

客まあ可愛い、坊やですこと。眼は母さん語りです
母日元は父親語りです
坊や、シャツとズボンを見せなさい

フワツシヨ

母親、これ妹のお歌子をひつたくるなんてなんです。両親と交つて貰ふのですよ。男の子、頭締つて言つたけど、イヤだつて云ふもの

生重集ざり

母親、裏から外に出るのはお止しよ
子供、ワッ、ぬるいよ

な美しい赤い色のドロ／＼したものになる別に木形屋から所定の型が廻され、是を中に入れて砂で(主として常用筋からとれた砂)形を作り、それに湯を流しこむのである。流しこんで薄いのならば五分で固まるが、分厚のものになると三分から一時間しなれば固まらない。固つた頃に砂をこわして中の出来たものを取り出し、仕上げをするわけである。

職

場は、明だめ型を作ること、作業は、吹きまへ、鉄止め、炭たきに分業されてゐる。又仕上げがあつて、型から出したものを、仕上げしてゐる。この吹きまへ、鉄止め、炭たきはその工場に専属してゐない、そののみを専門にしてゐて、十工場位を受持つてかへる／＼廻つて歩く職人があつてゐる。

友

愛の同志においとまを言付けて、四五町歩いて三共鑄造所へつゝ。こゝも同じ共同経営工場で、四十人働いてゐられる。川口としては廣い工場である。ここでは特殊な形造りを見せて貰つた。それは、焼型(日本製)と云つて、砂で作つた形を二週使つたら、それ／＼擦り壊してしまふのと違つて、一定の形を磨いて作り何回も使用されるものが出来てゐる。

友

愛では主として、機械類や工具類、風呂釜等)を作つてゐる。機械類と云つても、眞鍮製を作る機械の機械を作つたり、土木建築用の材料を作つてゐるので川口一帯は原町電氣業と匠数業業の餘波は相當高度に響いて来て、二三年前の除染な失業地獄は、吹きとばされた響きのよさであるが、それと共に、又その反面が押しよせて来るものと覺悟して、それ／＼の事前の対策が組合はじめ當局でも講じられてゐると聞いた。

賃

賃は、一級で(熟練工)、日三四三十銭で、一ヶ月九千五百見當りになり、五級で、一日一四三十銭で、一ヶ月三四四見當りになつてゐる。東京府外十三都市の鑄物職工の平均賃銀、二四十二銭に比して川口のそれは、二四〇七銭となつてゐる、悪い方である。

一帯に、作業は誰かからかむ仕事が多いので、胸を壓迫して健康には悪い状態の作業であること、砂をいぢる仕事なので、工場内も土間でも、原始的な荒々しい感じを受けた。蒸気がいゝとは云へ、中小工業用のも何か不安定な、そして炭酸ガス、砂をこつと包圍してゐる不安定な、林立してゐる煙の天蓋の合間から受けとめて左横ならした。

一カッター製眞は三共鑄造所(赤松常子)